
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 67. 2023. 9

伊福部音楽と家系図	-----	伊福部 達	1
ボリビアに行くことになってしまった！	-----	近藤 誠司	4
謎多き「菌類」と菌類ボランティア	-----	鈴木 順子	5
カルチャーナイト～チェンバロコンサート～	—	石川 弘晃・葉山 朝代・高橋 捺津	6

特別寄稿

伊福部音楽と家系図

東京大学名誉教授・同先端科学技術研究センター 研究顧問 / 北海道大学名誉教授 伊福部 達

1. 家系図の入った革カバン

現在、私どもが住んでいる札幌の家に、叔父の伊福部昭(1924-2006)は中学生から北大までの学生時代を過ごしていた(図1)。また、いくつかの純音楽を作曲して上京するまでの26歳から31歳の間も暮らしていた。戦後、叔父が上京したあとは、昭和55年に改築するまで、私は両親や祖母などといっしょに30年間にわたり住んでいた。



図1 伊福部家族
裏庭にて両親と共に。左から長男(宗夫)、父親(利三)、三男(昭)、母親(キワ)。次男(勲)による撮影、1925年頃

当時の家は、中に入ると武家屋敷のような趣があり、2階には薄暗い屋根裏部屋があった。そこにはいろいろな物が捨て置かれていたが、子供の

頃はその不気味な空間に踏み込んでそれらを手に取ろうという気にはならなかった。

実は、その屋根裏には叔父がこっそりとバイオリンの練習をした小部屋があり、学生時代に立ち上げた「新音楽連盟」の看板なども埋もれていた。また、そこは叔父の誕生日(5月31日)の証拠となる「ヘソの緒」が見つかった所でもある。後日、東京に行く機会があった時に、ヘソの緒を叔父に直接渡したところ「初めて会うものなので、いやはや何といたら良いのか」と照れながらも大事そうにして引き出しにしまった。そして、その屋根裏にはカビだらけの革のカバンも無造作に置かれていた。実は、その中には伊福部家の歴史を著す多くの古文書や巻物がびっしりと詰まっていたのである。

私どもの先祖は系図の上では2000年以上にわたり因幡の国(現:鳥取県)に住んでいたことになる。しかし、明治維新がきっかけで財産や権力を失い、祖父は逃げるようにして北海道に渡ってきた。その時、宝物を抱きかかえるようにして持ってきたのが伊福部家系図の入っていたその革カバンであった。また、祖母、つまり叔父の母、が嫁いだときの祖父の財産は革カバンと行李こうりしかなかったとのことである。しかも行李を開けたときには酒の徳利が入っただけで、それが行李の中でコロコロとむなしく音をたてて転がっていた

という。貧乏なのに酒飲みでプライドだけは高かった祖父への愚痴をこめて、祖母からは行李の話は幾度となく聞かされていたが、革カバンの中身については聞いたことがなかった。

その後、家系図は歴史の専門家によって詳細に調べられ、その全貌が明らかにされてきた。同時に、叔父が古代から受け継いできた日本人の感性にこだわり、初期の代表作である「日本組曲」や「日本狂詩曲」に「日本」を冠にした理由が分かるような気がしてきた。

2. 伊福部家の歴史

「因幡国伊福部臣古志」(図2)と名付けられた家系図の研究について言及すると、次のようになる。伊福部という姓は諸説あるものの、空気を吹くきふきべ「気吹部」の当て字であったといわれている。空気を吹く職業として宮廷における笛吹きであったという学者もいるが、タタラで鉄を作るためにフイゴに息を吹き込む製鉄屋であったという説が有力である。

1980年の中頃、前田憲二という映画監督が、日本に残っている神道の建物や儀式の多くは朝鮮半島から伝わってきたという主旨の「神々の履歴書」というドキュメンタリー映画を製作したことがある。そのとき監督から、伊福部家系図がその主旨の裏付けの資料となるので、是非とも映画の一部

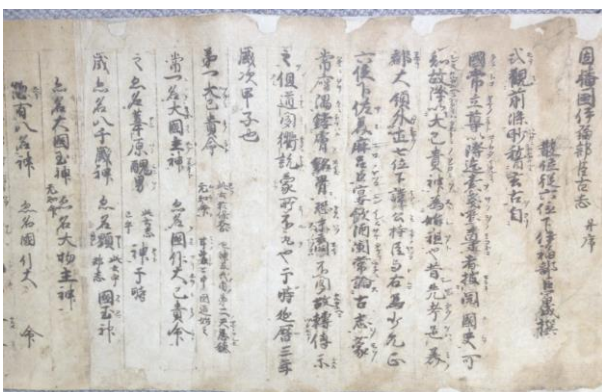


図2 伊福部家系図の序文と第一代目(大国主命)の記述

に取り入れたいと頼まれた。私が北大の助教授だった頃で、依頼を受けて札幌から系図を携えて東京の叔父の家を訪ねた。図3は、叔父と私が家系図の巻物を広げながら、初期の先祖は製鉄に大きく関わっていたのではないかと話している様子である。実際、家系図を見ると、4代目と5代目の

姓に製鉄技術を持っていた渡来人を表す「日椅(ヒコボ)」が使われており、6代目の姓には鉄製の武器である「鉾」という字が使われている。製鉄技術で作った武器と農具を活かすことで、広く勢力を伸ばしながら富と権力を手に入れ、因幡の地方豪族となったようである。



図3 叔父(右)と私(左)が家系図を説明
映画「神々の履歴書」(前田憲二監督)の1場面
(1980年代後半)

また、日本書紀や古事記などの古文書の記述と照らし合わせると、始祖はおおくにぬしのみこと大国主命になるので、現代まで68代にわたり続いたことになる。十数代目には日本で最初の大官とされるたけのうちのすくね武内宿禰の名前があり、古文書と同様に系図にも日本武尊とともに活躍した様子が詳しく書かれている。ただし、寿命は歴史と辻褄を合わせたせいかな享年316歳と極めて長い。700年前後の文武天皇の治世時には、とこたりひめ徳足姫という女性がうねめ采女として寵愛されたが、天皇は25歳という若さで崩御した。その姫を称えるために、日本で初めての女性の火葬となって因幡に戻ったとされている。その骨壺が、稲葉山の山中で見つかったことから、徳足姫から以後は歴史上に実在する人物と認められ、それからは徳足姫を伊福部家の宗祖としている。

その後、伊福部家は武内宿禰を祭った宇倍神社(鳥取市国府町)の宮司として江戸時代が終わるまで仕えた。伊福部家では当主しかその苗字を継ぐことができず、代々の墓がある神社の墓所にも当主しか入ることができないという厳しいしきたりがあった。しかし、残念ながら、時代が変化するたびに権力を失っていき、凋落して歴史から消

え去った。家系図の著者はその序文で「父親が酒の宴席で酔うといつも大和時代に栄えた伊福部家を自慢話として語っていたが、この話を伊福部家の再興を願って子孫のために書き留めておきたい」というようなことを書いている。

3. 伊福部音楽の底に流れるもの

北海道に移ってから、祖父は人一倍のプライドを持って古い家系のお話を私の父や叔父に繰り返し聞かせ、一方では中国の老子の教えに基づいた徹底した教育を行った。叔父は祖父のお話を聞きながら、古代の日本を思い浮かべ、その風景が作曲の発想の源になったことと思う。どこまでも昔に遡り、ゴジラのような恐竜の生きていた時代まで思いを馳せることができたのかも知れない。本当に世の中に残る曲を作るには数十年はかかると口癖のように言っていたが、伊福部家の2000年の歴史から考えると数十年は短い年月である。叔父は、そもそも時間の単位が普通の人とは違っていた。

私は2002年から20年間にわたり東京に暮らすようになったが、それを機会に直接叔父に話を聞くようになった。ある時、叔父は「最近、難聴が進んできて和音が割れて聞こえるので困っている」という。早速、古くから付き合いのあった東大の耳鼻咽喉科教授に話したところ、医局の総力を挙げて診断と治療をしたいと言ってきた。何度も東大病院に行くことを勧めたのであるが、結局一度も行くことはなかった。叔父は最新の補聴器を使いながらも「ペロを、力を入れて口から出し入れすると耳が良くなる」という古い「治療法」を信じ、実践していたのである。新しいものと古いものがいつも同居している叔父の一端を見たような思いであった。しかし、難聴を診てもらう機会もなく、叔父は2006年の2月にこの世を去った。

コロナウィルスの流行が始まる前の2019年の秋に、私はNHKの鳥取支局から「緊急地震警報と伊福部昭の音楽」と題して講演をして欲しいと頼まれた(図4)。この講演は因幡万葉記念館の創立25周年記念の催しの一つであったが、大伴家持が国造として因幡に赴任していた時代に書いた5つの和歌をもとに叔父が作曲した「因幡万葉の歌」

を披露することがメインイベントであった。その歌を聴いているうちに、常に、遠い過去に遡って普遍的なものを見つめ、それを近代音楽で具現化するという叔父の姿勢が理解できるようになってきた。

そういえば、スペインの作曲家コーランドから依頼されて献呈した「ピアノ組曲」(後の管弦楽曲「日本組曲」)は19歳の頃、旅行先で見聞きした日本の伝統文化である「盆踊り」、「七夕」、「倭武多(ネプタ)」、「ながし」がベースとなっている。21歳の時に書いて国際コンクールで優勝した管弦楽曲「日本狂詩曲」も、札幌神社(現北海道神宮)のお祭で山車とともに笛や太鼓で街中を練り歩く、稚児行列の情景や音楽がモチーフになっているという。

私が2022年に札幌の自宅に戻ってから1年が経った。武家屋敷のような家をレンガ造りの北欧風に変えたので昔の面影はない。しかし、家の中には古文書や巻物がびっしりと入った革カバンが今でも一室に置かれている。その古い資料を整理しながら、伊福部音楽の底に流れるものの正体の一つは、幼少のときから繰り返し聞かされてきた悠久の歴史にあると改めて確信した。



図4 鳥取市での講演後に訪ねた叔父の墓(2019年秋)

本稿は片山杜秀編「伊福部昭」(河出書房新社、2014)の分担執筆(pp. 35-38)の一部を改変・加筆したものである。

特別寄稿

ボリビアに行くことになってしまった！

北海道大学総合博物館 資料部 近藤 誠司

2017年に、JICAが行っていたボリビア日系人社会の支援事業が終了し、この事業を大学連携で北大が行って欲しくないかという呼びかけがあった。そこで北大農学部が中心となってJICAの草の根技術協力事業に応募し、2021年にこの計画が採択され2022年の7月に契約締結となった。そこで白羽の矢が立ち、早速2022年の10～12月まで当地の日系人居留地に滞在することになったのである。当地は、南米中央部ボリビア国の東部平原地帯で、サンタクルス市という大都市から北東、車で1.5～2時間(100kmか)のオキナワという地名がついた日系人居留地である。サンタクルス市から北西に同じ距離を行ったあたりにはサンファンという日系人居留地がある。私どもの草の根プロジェクトの対象地域が、この二つの日系人居留地である。このプロジェクトは「日系人社会が牽引する持続的な循環型農業システム確立のための支援」という名称の事業で、土壌-圃場-畜産を有機的に結びつけ、持続的な循環型農業システムの確立を目的としている。この地はアマゾン川の源流に位置し、開拓前は鬱蒼たるジャングルで、戦後、開拓に入った日系人達は非常な刻苦の末、ここを切り開き見事な農地を作った。その後40年間は何の肥料もやらずとも何でもできる豊かな農地であったが、突然収量が落ち始める。地力が急激に減衰したものだ。そこで現在、どちらの居留地も輪作体系を導入し、不耕起栽培を取り入れ、さらに緑肥栽培を応用しはじめた。ただ、家畜排泄物を堆肥として土壌に還元するシステムが十分機能していない。そうした点から、私ども北大農学グループが耕と畜を効果的に結びつけ、よりよい土壌を作っていくという技術支援プロジェクトをJICAの支援の下、開始したものである。

プロジェクトは5カ年計画で、北大の土壌や作物、畜産の専門家がそれぞれ数週間の予定で入れ替わり立ち替わり、現地で調査・指導する計画になっており、私は畜産の専門家として、また現地の調整員として年

に5～6か月ほどこちらに滞在することになっている。プロジェクトは始まったばかりであり、2022年度にJICA支援で作られたフィードロットで牛糞を集め、それを堆肥にして圃場に還元するほか、放牧地と緑肥と圃場を組み合わせで直接ウシの糞尿を還元するという方策を実施してみようと努力する毎日である。

オキナワのこの地は亜熱帯で日中の日差しはひどく暑い。マスコミの報道では、ボリビアは高地で高山病になりやすく、政情不安で治安も悪い、とされるが、この日系人居留地は平地で高山病などない。南米の最貧国と言われているが、ここでは食べ物に不自由することはないらしい。路肩に植えられたマンゴーの木から11月にはマンゴーの実がいくつも落ちているが「おちたやつは美味しくないからね」と現地の人々は誰も拾わない。拾って食べているのは私くらいだ。

治安も悪いらしいが、少なくともここオキナワ地域ではほぼ全ての住人が顔見知りで、皆ファーストネームで呼び合う世界だ。私が歩いていても、皆さんに呼びかけられ、写真の様な綺麗な風景の中で、奢りのビールをご馳走になっている。



ここボリビア、サンタクルス市街の夕日は本当に美しい

謎多き「菌類」と菌類ボランティア

菌類ボランティア 鈴木 順子

私たち菌類ボランティア（総勢6名）は、北大総合博物館資料部研究員の小林孝人先生のご指導の下、三階のS309号室で月に一回標本の整理・収納を行っています。「菌類」というと日常の言葉では「カビ」や「キノコ」が連想されますが、私たちが扱う標本には蘚苔類や地衣類（いわゆる「コケ」）も含まれています。

活動日はメンバーの都合も考慮しながらその都度決めています。第二水曜日が比較的多いです。月一回という活動の頻度は他のグループに比べると少ないようにも思えますが、無理なく長く続けていくことを主眼に、焦らず地道に活動してきました。地道すぎて、「どんな活動をしているのかよくわからないグループ」といった印象をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。

そこで、この場をお借りして具体的な作業や活動の様子、印象に残ったことなどをご紹介します。

新たに採集した菌類は、乾燥処理した後にビニール袋に入れ、更に紙の容器に納めて学名や採集地・採集日等を記入した標本ラベルを貼り付けて分類収納します。

博物館に収蔵されている昔の標本で、外袋が劣化しているものは、新たな袋に入れなおします。必要があれば標本ラベルを書き写して貼り付け、分類収納します。

明治・大正・昭和と三つの時代にわたって収集された古い標本の中には、高名な植物学者によって作られたタイプ標本（新種記載の論文に用いられた、その種の基準となる標本）や、往時は植民地であった南樺太や台湾で採集された標本も含まれていて、いろいろな意味で驚かされます。また、圃場で栽培された野菜の葉や茎に生じたカビの標本がたくさん収蔵されていたことも印象に残っています。明治時代に外国から導入された野菜である白菜の葉の病害標本を扱った時には新天地での農業振興を目指した先人たちの努力が偲ばれて厳粛な気分になりました。

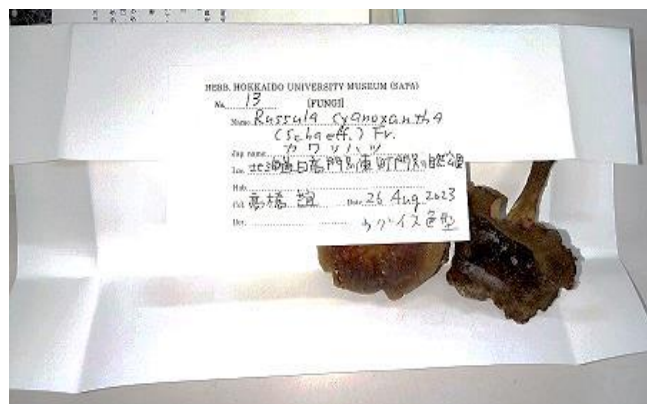
こうした古い標本に対する思いは私個人のもですがメンバーの皆さんもそれぞれに様々な感想などを口にしつつ和気あいあいと作業に勤めています。

机上の作業ばかりでなく、秋にはキノコ観察会と称して市内の公園などへ出かけます。公園に向かう以前に駐車場で様々なキノコを発見して、なかなか公園にたどり着けなかったこともありました。また、時には小林先生がご自分の研究成果をわかりやすく説明してくださったり、標本を顕微鏡で見せていただいたりして、学術の世界に触れることもあります。

このような活動を通じて、菌類をより身近に感じられるようになりました。菌類の本体は地中の菌糸体であり、降雨などで地中の環境が変わると「担子」（いわゆる「キノコ」）を地上に伸ばし、胞子を飛ばして生息地を広げます。また「菌根菌」といわれるグループは、植物の根に入り込んで「菌根」を作り土中の窒素などを吸収して植物に供給し、代わりに植物が光合成によって生産した炭素化合物を得る、という共生関係にあるそうです。

自然界とは生物どうしの緊密な関係の上に成り立っているものですね。

以上のようにマイペースな菌類ボランティアですが、ご興味を持たれた方はぜひ一度S309室を覗いてみてください。



大きな標本を袋に収めるのは一苦労

活動報告

カルチャーナイト

～チェンバロコンサート～

2023年7月21日

北海道大学農学部4年 石川 弘晃

私は農学部4年生で、去年の10月より、植物とチェンバロボランティアの一員として活動している。今回、カルチャーナイトで演奏会があり、人生ではじめてチェンバロを人前で演奏する運びとなった。曲はJ. デュフリのクラヴサン曲集第1巻よりアルマンドを演奏した。18世紀フランスの、流れる様な美しい曲である。

本番では、意図せず2本の弦で弾いてしまったため、プログラムの最後に、改めて片方の弦にて演奏をさせて戴いた。2弦より1弦の方が音量・音色が落ち着いており、弾いた印象が随分と異なる。直前にチェンバロ・チェロの素敵な演奏を聞いていたこともあり、2回目は私自身も落ち着いて演奏に臨み、拙いながらも流麗さが表現できたのではないかと思う。



チェンバロ演奏の石川さん

北海道大学文学部2年 葉山 朝代

カルチャーナイトでチェンバロの演奏をしていました、学生ボランティアの葉山と申します。

会場は開演前から満員になり、とても緊張しましたが、楽しく演奏することができました。貴重な機会をいただきありがとうございました。

北海道大学大学院文学院2年 高橋 捺津

今回のコンサートでは、夜の博物館でお客様をお迎えして演奏するという、とても貴重な経験をさせていただきました。マルチェロのチェロソナタでは大変緊張し、手がガタガタになってしまい、思うような演奏ができなかったという反省があります。一方、葉山さんとのアヴェ・マリアは、練習よりも上手に息を合わせて演奏できたと感じます。皆様の元にも、しっとりとした旋律の美しさをお届けできていたら大変嬉しいです。最後になりましたが、ご来場くださいました皆様、博物館スタッフの皆様に心より御礼申し上げます。



チェンバロ演奏の葉山さんとチェロ演奏の高橋さん

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No.67

- ◆編集人:北海道大学総合博物館 ボランティアの会(編集委員:星野フサ、今井久益、久末進一、山岸博子)
- ◆発行人:在田一則
- ◆発行日:2023年9月
- ◆連絡先:〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>